ゐる。壯年時代は銀行家であつたが寧ろ理財より趣味に生きた人で金をためるより本をためる事が好きであつたと思ふ。近年三面子先生遺稿日本史傳川柳狂句も、これを整理して少數の特志家へ分與されてゐたが中途で殪れられて殘念な事である。とまれ寥々たる古川柳研究に比較的短い期間に於て大なる足跡を殘し、忘れられぬ印象を與へ、先輩が難物視した辭彙を仕上げられた事は、色々な批判を絶して其功績を十分稱讃せねばならぬ。聞く處によると手近の同志達で、辭彙完成の祝典を極質素に催す下相談が出來て居たとかいふが遂に實現を見る前に他界せられたのは翁を知るものゝ心殘りの一つである。今は艸彩庵駒村居士（これも自選の法名）昭和十八年三月廿四日卒去白木の位牌の前に立てかけられた物言はぬ溫顏寫影を伏し見るのみ。噫

（三月末日記）

川柳界の大恩人

西島○丸

私の友達に、海賀變哲といふ人がありました。開けてる辯にムッつりした感じを與へる人でありました。はじめて逢つた駒村サンはさういふ感じを與へる人でありました。

駒村サンは、いろいろの事をなさいました。その多くの仕事の中で、一番大きな仕事は川柳辭彙だと存じます。

この仕事位い、割に合はぬ仕事は無いと存じます。金は要る、根氣は要る、苦情は多い、はけ口は少ない、小面倒な精も根もつきる椽の下の力持の仕事であります。しかも永い年月を費して、よくやつてくれました、一寸、出來憎い事であります。

今後、これによりまして、どの位い、人が助かるか解りません。發行してる途中で、よく知つたか振りをして、他の雜誌の隅で、鎗を入れてる人を見た事があります。實にイヤな感じをもつたものであります。ナゼ、直接に駒村サンに手紙して協力せぬのであらうかと、駒村サンにも申上げた事であります。

ヒトのやつてる事を、トヤカク言ふ事はたやすい事であります。併し、その小うるさい中にあつて、コツ〳〵仕事をして行く事は容易な事ではありません。駒村サンほんとに、よくやつてくれました。

こういふ人を亡くした事は、全く殘念であります。幾多筆禍もおうけになりました事でせう、よくこらへて人のために盡して下さいました。

人の目につく、華やかな事ばかり、ほめて居る世の中は、奈落に眞黑になつて働いて居る人を忘れては困りますと、申し上げたいのであります。（廿八日記す）

駒村さんのことども

鈴木安藏

一

幼ない時から私たちは駒村さんと呼び慣れてきたので、この一文でも駒村さんと呼ばせていたゞく。これが一番親しみのある、なつかしい呼び方である。大曲さん、省三さんとも私たちの鄕里の老人たち（私の母など）は呼びもしたが、その人々でも少しでも交際のあつた人々の間では駒村さんが普通であつたやうに思ふ。

私たちの鄕里――福島縣相馬縣小高町――では、駒村さんたち以來のことゝ思ふが、俳句が盛んであつた。その關係で人々を呼ぶのにも、駒村さんとか絹村さん（半谷清造氏）とかてる女さん（私の姉）とか呼ぶのである。

私にとつての駒村さんの一番古い記憶は、髮の黑々とした

瀟洒な——と言つても氣障なところの微塵もない、凛としたしかも優しい、なつかし味の溢れるやうな面影である。今から考へると駒村さんが三十二、三歳前後のわけである。良い意味のハイカラであり、地方の最高のインテリであり、文化人・良識者であつた。私の亡父の最も親しかつた友人であり亡父の遺稿集を自費で出版して下さつた方であり、私たち一家にとつては忘るべからざる人であつた。それよりもさらに私にとつては、亡父について語つていたゞける唯一の人として、絶對にかけ替へのない人だつたのである。しかも駒村さんの壯年から老年時代、小高、福島の間を往復した頃、また東京に居を定められた頃は、私の高等學校、大學時代から打ちつゞく社會的「嵐と迫り」の時代ともいふべきときで、私はその渦中に飛びこみ、若さのゆゑもあつて、しばらく亡父の思ひ出も鄕里のことも忘れ去つたのであり、また駒村さんとの直接の交渉も——年齡的に父子のへだゝりあることにもよつて——絶えてをつた。

近來私もやうやく多少とも年齒を加へたゝめであらう。亡父のことも折にふれ思ひなつかしまれ、その二十八年足らずの短い生涯ながらも、人間として歩んだ道の豐かさは自分の及ぶところではないやうな感じもして、時あらば詳細な年譜なども編んでおきたいと思ふにつけ、一層駒村さんのことが思ひ浮べられたのであつた。

たま〳〵本誌へ私の寄せた「憲法史資料調査の旅」(昭和十二年四月號)が、まことに偶然と言へば偶然、奇蹟と言へば奇蹟、駒村さんの眼にとまつた。思ひがけなく駒村さんから「書物展望」は、この頃寄贈が絶えてをつたが、「今日齋藤が遊びに來て持つて來てくれた、不圖君の一文を見て、なつかしさがグッとこみあげて來た」といふ意味の御葉書をいたゞいた。この一文には、日本におけるクリスト教傳道の偉大な先驅者として駒村さんや亡父などもその教へをうけた故シュネーダー博士に、旅行の途次京都の岳父の家で圖らずもお目にかゝれたことなどを記したのだが、それが駒村さんに、その青年時代を想起せしめる機因となつたものと思ふ。駒村さんは、當時における地方文化開拓・指導の最も新しい、最も進歩的な一つの形態であつたクリスト教の挺身者でもあつた。

さてこんなことから同じ東京に駒村さんが住られることがハッキリと意識されたのであつたが、そのうち昭和十六年一昨年、駒村さんが發意されて、在京小高出身者で小高會を作らうといふことになつた。私は、かうした機會が出來て、お訪ねしようと思ひながら無音にすぎてゐた駒村さんとお目にかゝれることを何より幸福と感謝する氣持であつた。その第二回の集まりを、昨夏、鄕里で開くといふ御通知をうけ、またとない機會と私も歸省した。

その前に、多分昭和十年ごろであつたと思ふが、上京した姉に案内されて戸塚町(?)かの御宅に御邪魔したことがある。川柳辭典を編纂してゐるといふ御話であつた。久々で御目にかゝつた——考へてみると約二十年近くである——駒村さんが、幼時の記憶と反對に、黑々とした頭髪がすつかりなくなり、おぢいさんに變つてゐられ、ハイカラな人が、小高辯丸出しで話され、いはゆる好々爺然となつたのには驚きもし、またひとしほなつかしかつたのであるが、鄕里での小高會のときも、さらにその感を深めたのである。私の記憶の駒村さんは、依然掲げた寫眞にあるやうな駒村さんだつたのである。

この黑髪の、恐らく覇氣に富むだ駒村青年が晩年の研究・趣味一如、貧富不二に徹した駒村老となられるまでの經緯、足跡については私は何一つ知らない。だがこの鄕里における小高會の半日、そして翌日歸京の際折よく汽車を一緒にし、さらに幸ひにも乘客の少なかつた二等車——駒村さんは平然〳〵と思ひながら無音にすぎてゐた駒村さんとお目にかゝれることを何より幸福と感謝する氣持であつた。その第二回の集まりを、昨夏、鄕里で開くといふ御通知をうけ、またとない機會と私も歸省した。

として三等車の混雜の中に身をおかれた。若い私がそれをいとふて無理やりに二等車に移つていたゞいたのである。故人の悟り切つた生活態度を誤りつたへぬやう、こんなことも附記しておく——の七時間を持ち得たゝめに、私は年來の宿願であつた亡父について直接御話を承るといふこと、亡父の無二の親友で今なほ健在であつた人に御目にかゝる樂しさを持つことを、ほゞ遺憾なきまでに味はひ得たのである。これがせめてもの慰めとなつてしまつたといふのは如何にも悲しい。自分の懶怠、不精から、何一つ御報ひもせず、御助力もできず、また御教示も十分に仰がずして御別れしてしまつたことは如何に悔ひても悔ひ足らぬのである。

二

歸京後數日にして、私は亡父の手帖、回覽雜誌などの若干を持つて御訪ねした(八月二十七日)。そして半日、父のこと駒村さんの若かりし日の鄕里などについて承つた。その時のものなつかしげな眼ざし、慈父のやうな溫顏は、あり〳〵と瞼に浮んで永久に忘れられない。思へば鄕里の小高會から歸京されたときも、「實に故鄕は好いですなあ」と書いてよこされた。また小會でも、いたるところで、幼時の思ひ出に沁々と耽けられたのであつた。これが私としては最後の御別れ

になつてしまつたことは、返へす返へすも殘念であり、その後御病氣であつたことも知らずにすごしたことは、何とも申譯もなく慚愧に堪へない。

駒村といふ號の由來をおきゝしたら、「私たちの若いときは芭蕉以上に蕪村崇拜で、何とか村の字をつけようと考へて駒村としたのさ」といふお話であつた。相馬郡の馬、鄉里の名物行事野馬追祭の馬に因まれたのであらう。さう言へば、掲げた寫眞の裏に、亡父は「三十六年七月四日、小高へ出てのかへり多忙の際撮影」とし、なほ「野馬追の騎馬に驚く日傘かな」と記してゐる。この寫眞は平町（今の平市）でとつたやうである。三十六年七月と言へば亡父死去の半歲前であり、駒村さんは二十一歲でなかつたかと思ふ。

亡父もさうであつたが、それ以上に駒村さんは早熟といふか、年齡に比して大人であつたと思ふ。當時の人は一般に今日の我々よりは早く老成してゐるにしても、駒村さんが亡父の遺稿（「餘生遺稿」）を出版して下さつたのは大正四年であるが、その跋文などを拜見しても、さらにまた御自分の「枯檜庵句集」を出されたのは大正七年であるが、それを拜見しても、我々からは到底三十五、六歲の手になるものとは思はれぬほどである。それだけに人生の表裏、眞實については豐かな洞察、味到もせられ、六十二年の御生涯は、內面的に極めて充實したものであつたと信ずる。

左に右の二書から、駒村さんの前半生をしのぶよすがとなる文字を引いて、一つは私情において忘れがたき事どもを殘し、一つは晩年の知友の方々へ御知らせしておきたいと思ふ。

「餘生遺稿」――「追憶小記」

「明治三十二年秋の末であつた。小高小學校の宿直室に當時の敎頭眞鍋氏を訪ねて餘生君と落ち合ふた時、「君俳句を作らうぢやないか」と云ふ事で互に三四句づゝ怪しいものを捻つた。二人の間には福島新聞が披げられて、其の一面には隈水吟社の募集句が麗々しく掲げらてゐた。これが餘生君と自分が俳句に携はる抑々の皮切りだつた。當時君は三星炭礦會社員でよく平、湯本等へ往復してゐたが、逢へば二人は必ず俳句を作つた。

「三十四年の三月、餘程健康も回復したと云ふて君は房州〔療養轉地先〕から歸京した。〔中略〕五月には支配人代理と云ふ格で小高銀行に出勤するやうになり、二人は玆に毎日顏を突き付けて仕事をすることゝなつた。君は內々俗謠が得意で、店の閑散な時にはよく『有明の燈のもとは菜種なり』と云ふやうな文句を低聲に唸つた。客の前でも憚ら

ず傳票などへ卽興の俳句を認めて、自分の机の方へ廻はしてよこすなど極普通だつた。

「小高に澁茶會を起したのは三十四年の秋だつた。〔中略〕この間輕跳な自分は兎角時流を逐ひ飄逸を學び、論辯亦大いに努めるといふ有樣だつたが、君は默々として爭ふことなく只管句境に思ひ入るばかりだつた。」

この末句は謙遜の文字である。「輕跳」とは駒村さんの嚴しい自己省察であるが、半面より見れば、地方人としては稀有な、良き意味の覇氣に燃え理想を追ふ情熱　意氣の持主であつたことを示すものと思ふ。私は俳句については語る資格なきものであるが、亡父の句が多く平凡、穩健と言へば穩健陳腐なのに比し、駒村さんの句は奇と言へば奇、獨創的であり情感は豐かにして感覺は新鮮、觀察は鋭いものであつた。その「枯檜庵句集」から、若干拾つてみよう。

新　年

老の身に一ト粒の猿や猿廻し

人日偶成

心いよゝ七草の粥にうつろなる

春

繪草紙に遲日の市の埃かな

春の夜の君にまみゆるけはひ哉

行春や呼へと酒なき藤の茶屋

夏

明け易き軒の吊草匂ひけり

合歡の雨鶏飼か晝の宿淋し

青簾垂れてへたてぬ森の冷

粽といて妻と端居や竹の月

紫陽花に籠りゐる蚊や晝の雨

富士山頂

淨覺の石たゝ寒し夏の雲

函根越

はゝき木に泊れといふや古き宿

秋

堂の戸にけふのみの秋の夕日哉

棚經や鳥羽の踊を餘所心

朝顏や起きて忘れし夢二つ

似顏繪に寫樂あり蓮の實飛ぶ

浦夫死す

地藏樣の背に泣かて秋の螢逐へ

飯坂にて

かな〳〵悲し一ト日の酒の盡きければ

三叟を聽く

新内に老こそ憂かれ秋の雨

冬

行年や妻戀ひ見れは貧の櫛

教會のあはれな歴史クリスマス

山茶花や枯木の中に墓一つ

鐘撞いて短き日なり歸り花

餘生を憶ふ

河豚食へは諫むる友のありけるに

而して本書の「自序」こそ、最も良く駒村さん自身の當時の心境を吐露せるものであらう。曰く——

今春早々、余は斗食を辭して、遂に放浪の身となれり。余はこれを一期として、余の吟稿をも亦一炬に附せんとす。

顧れば余が彼の塵務に沒頭すること、この俳裡に游液すると同に二十年。今や忽焉としてこの二つの境地より離るさながら蟬殼の枯木を捨つるにも似たり。

余に一友あり、餘生と號しぬ。明治三十七年二月、病んで逝く。

余の舊庭に一枯檜ありき。大正二年三月、隣火に類し、草庵と共に燒く。

爾來余の俳藪は甚だ空莫にして、爰に自家の咏草二萬餘句を閲するに、舊作の總て陳套なるの外、僅に近什の零碎を數ふるのみ。今これを余の庵號と共に地下に葬るに當り聊か追懐の資たるもの百七十句を自ら選し、百部を印行して故舊に頒つ。

或は余に新生の日あらん。されど余の吟情は頓に再燃を期し難し。蓋し本集は、余が生前の遺稿とも謂つ可き乎。

大正七戊午年晩春　　福洲の假寓に於て

著者識す

三

駒村さん晩年の生活、業績については知友の方々の知らるゝごとくである。私は、少なくとも同じ郷里のものとして、その歩まれた道は同郷人間にあつては、稀有なものであつたと思ふ。駒村さんが單なる銀行員として生涯を終り、退職金などで悠々老後をすごしたとしたなら、私はかほどの敬愛は感ぜずにすんだと思ふ。青年時代からの本質的な要求を貫き

通し、それに實を結ばしめた努力、學閥的背景もジャーナリズムの支援もなく、獨力良く——親友の人々の心からの聲援はあつたにしても——、しかも恐らくは餘りに惠まれざりし物的條件の下に、趣味と心的要求とを生活と一致し完成せられた態度には深く打たれるのである。とかく世俗的な相馬地方には容易に求めがたい文人的氣質、氣慨、氣魄——私などもつと〳〵その警咳に接し、人間的圓熟と洞察と豐かな情感とを頒けていたゞかねばならなかつたことを痛恨せざるを得ない。とともに、その生き抜いた尊い姿、態度は、深く私どもの仰いで學ばんとするところである。恐らくこれが亡友の遺兒たる私に、駒村さんが殘されし最大の教訓であらうか。

昨夏御會ひした折、永井荷風の年譜を志してゐられるとの御話であり、その青年時代に愛讀された明治文學、大正文學の知識、その雰圍氣の體得を併せ有せられる駒村さん自身によつて書かれることによつて、明治・大正文學史の貴重な一寄與が見られるものと期待したのであつたが、志をとげられずして逝かれたのは、學界のためにも惜しみてもなほ餘りある。が、それも言ふても詮ない。

告別式の翌日、燒香に參上せし折、齋藤昌三さんに偶然同座して(これも佛のみちびきであらうか)、この一文を草する機を與へられたが、先きの「憲法史資料調査の旅」と言ひ、これと言ひ、まことに不思議な因緣であり、本誌に對して謝する次第である。

駒村さんには新太郎君といふ令息があつた。私より一、二級下であつたが、秀才、父君の望みを囑する絶大なるものあつたが夭折された。昨夏車中でも沁々同君を追憶されて種々物語りがあつた。恐らくは眼前の私を見て、「新太郎が生きてをればこれ位になつてゐたのに」との感慨を抱かれたことであつたらう。そして私もまた、「父が生きてをれば駒村さんのやうに未だ〳〵元氣であり得たのに」と、そのとき心ひそかに感慨にふけつたことであつた。今度、遺兒浦子さんに幼時お別れしたまゝ二十年餘で御會ひして、そこに新太郎君の俤をしのび、一層感無量であつた。

まとまらぬこの一文を謹んで　駒村先生の靈前に獻ずる——

初七日もすぎし四月初め、雨の日

棣花草屋にて

追悼五首

うつし世にありへしときは相見ずて亡きを悲しむ愚かさにをり

書讀むにつかれしときは屏風など貼りてすごすと言ひ給ひしが
若き日の面影なほも口許に殘りし人をなつかしみしが

駒村の三名著

石川巖

駒村老を知り初めたのは今から約二十有餘年にも及ぶだらうか、大正七八年頃であつたか駒村と同鄕の惡友富士崎放江が東道で、吾が千駄木の陋宿を訪はれたのが抑の初まりであつたやうな氣がする。爾來不離不卽親友といへる側ではなく互に利用し合う程度で交友關係をつゞけて來たに過ぎないので、駒村の人物に就ては何等語る資格を有たないが、渠の遺つた仕事には可なり共鳴を禁じ得ないものばかりで、その點大に駒村を得とするものである。殊に晩年心根否それが爲め或天壽を縮めたかとも思はれる『川柳辭彙』二千頁の大著を初め、例の『末摘花通解』『川柳岡場所考』など後世を喜ばせるに足る名著は、駒村をして恐らく永遠不朽の名を傳へる著作であらう。

晩年例の「春峯庵」僞作問題以後、全く浮世繪界から斷然足を洗つて、專念一事業に沒頭して遂に完成の域に達したことは、駒村の爲に賀すると共に、駒村も亦以て冥すべきである。欲を言へば八分通り完成に近づいたと言はれる『永井荷風書誌』の遺業であるが、これは他にもやりかけて、寧ろ駒村以上のものを目論見つゝあるものが居るといふ噂がある位だから、これ等の如きは未完成に終つても、前記三事業に比し左程惜いものとは思はれない。

とことはに別れし春の小庭邊にたゞ紅椿赤々と咲く
人間のあまたの苦難負ふべくはなに難しなど言ふべきわれぞ

好事家大曲駒村

小島烏水

齡古稀を過ぎて、且つ大病後、氣息菴々たる私が、一と廻り前後も若い知友の、葬儀に列したり、追悼文を書いたりしたことは、一再に止まらない。いくら年を取つても、先へ死ぬことを希ふわけではないが、いま又、大曲駒村の哀詞を作ることは、悲しい逆緣である。

駒村と私との友情は、浮世繪に依つて結ばれた。二人は昭和三年「浮世繪」といふ雜誌を發刊した。（その以前、大正四年に、私は酒井好古堂から同名の雜誌を出したことがある）併し第二の「浮世繪」の方は、關係書肆の不誠意で、僅か四號限りで廢刊された。翌昭和四年は、捲土重來の意氣込みで駒村と私の外に、田中喜作、永見德太郎、井上和雄、七戸吉三、山村耕花を同人として、浮世繪志會を組識し芸艸堂から「浮世繪志」といふ雜誌を新刊することになり、同會の事務所を駒村の宅に置いた。

その頃、私は別に、松木喜八郎氏と相咨つて、展覽會本位の彰美會を立て、浮世繪の展覽會（但し非賣品）を、松木氏商舗の樓上に催うしたことがあつたが、その時は、大抵駒村の助勢を得た。殊に婦人の化粧美を題材とした浮世繪版畫展覽會は、二度と、これくらゐの佳品を揃へられない虞れもあつたので、「婦人化粧美傑作圖錄」（昭和五年）を編纂、芸艸堂から發行することになり、私は解說のノートを作つたが、駒村の希望もあつたので、駒村にその仕事を讓つて、私のノートを交付した。それが幾分の役に立つたかと思ふが、殆ど全部は、駒村の書き下しである。その本に私は序文を書いた。

駒村は、多年の心願であつた「浮世繪類考」の底本を作ることに腐心して、作州津山の藩主、松平確堂公舊藏の「類考」